

## ルソーにおける夢想の諸相

佐々井利夫

### はじめに

ルソーは、しばしば一方において現実を鋭く糾弾する論理を展開し、他方において理想的世界を論理構築することを試みた。後者の論理を現実世界の直接的な救済方途として期待する読者は、しかしすぐその非現実的で実現の困難な論理に気づかされるであろう。たとえば、『人間不平等起源論』における自然人の世界がどれほど魅力的に描かれても、現実の人間が享受する世界ではない。また教育論『エミール』については、一人の教師と一人の生徒という設定からして、すでに非現実的である。著者自身がその書の序文で、「実行の容易さをめざす」といったようなことは「私の主題には本質的ではない」<sup>1)</sup> (Em., IV, p.243) と述べ、その書の非現実的性格を強調している。『新エロイズ』もまた、「現実の人間のことは全く忘れて、その徳によっても美によっても天上のものである完全な被創造物」(Conf., I, p.427) の物語として書かれた。

このように、ルソーは現実の諸悪を攻撃するが、その改善への現実的手順の明示よりも、むしろ、非現実の世界を希求する傾向にある。J.ゲーノは、ルソーにとっては「空想の世界こそ真実な世界であった」<sup>2)</sup> と述べているが、本稿においてはルソーの夢想を手がかりに非現実の世界に「真実」を求めようとした彼の心象を探っていきたい。

### 1. 夢想と想像力

ルソーは、『告白』のなかで、「どんな境遇をも自分の空想で飾るほど豊かな想像力、いわば思いのままに、この境遇からあの境遇へと移れるほど強い想像力をもっていたので、私はどんな境遇にいても、ほとんど問題はなかった」(Ibid., p.43) と強調している。こうしたルソー特有の想像力が、困難を極めた彼の境遇の救いでもあったし、また妄想の源でもあったことを、彼の自伝的著作の読者は容易に理解することができるであろう。

ところで、この豊かで強い想像力は逆境のときにこそ、活発になるとされている。たとえば、彼は『告白』の別の箇所で、「私の想像力が気持よく働くのは、私の境遇がもっとも不愉快なときだけであり、反対に、なにもかもが私の周りで微笑んでいるときには、想像力はおおよそ微笑むことはない」(Ibid., p.171) と述べている。この文章は、ヴァランス夫人に再会するために、リヨンからシャンベリへ向かって「心地よい未来しか眼に映らない」、満足した気分で旅したときのものであるが、「快い夢想は少しもなかった」(Ibid., p.172) と言葉を続けている。こうした言い回しから、ルソーの「快い夢想」は、「境遇がもっとも不愉快なとき」に想像力を媒介にして生まれる、と解釈される。また、『孤独な散歩者の夢想』

(以下『夢想』と略す) では、想像力の助けを借りれば、どこにいても——たとえ「バスチーユ牢獄や、眼にとまるものなどなにもない地下牢のなかでさえ」——夢想にふけることができる、と書いている。(Rêv., I, p.1048) この箇所は、モチエを追われてサン＝ピ

エール島に逃れたときの夢想体験に関連して述べたものである。

これら二つの事例が示しているように、ルソーの夢想は、多くの場合、境遇から生じる不安の意識や孤独であることの実感を背景に、想像力を媒介して生まれるのである。しかし、ルソーは境遇が困難であるとき、何故想像力の働きを借りて夢想に向かうのであろうか。

彼は『夢想』の最後の場面で、「これほど波乱万丈の人生をほとんど受身で生きてきた私」(Ibid.,p.1099)と、起伏に富んだ生涯とそれへの対処の姿勢を表現している。著者のこの表現をそのまま受けとめて自伝に眼を通すと、彼は確かに「波乱万丈」的局面においてしばしば消極的対応をみせている。すなわち、ルソーは不安や孤独に襲われたとき、ただちに省察や行動によってその原因となっている困難を解決しようと努力しないで、むしろ困難をそのままに放置することもあった。『告白』にはそうした事例が多く示されている。たとえば、無名時代、期待の「音楽記譜法」が注目されず、窮状に陥ったときがそうであった。「絶望に身をまかせる代わりに、私は静かに怠惰と天の摂理の世話とに身をゆだねた。そして摂理に働く時間を与えるために、私にまだ残っていた何ルイかを、急がずに食いつぶしはじめた。」(Conf.,I,p.287)この場面ではルソーはまだ世間との戦いを始めておらず、「怠惰」は性格に由来するといえるかもしれない。『対話』にも、「ジャン＝ジャックは、観想的なひとがすべてそうであるように、不精で怠惰である」(Dial.,I,p.845)といった記述がある。しかし、上述のサン＝ピエール島に移ったときの困難への消極的対応は、性格という理由だけではないであろう。すなわち、彼は「迫害」への抗議行動よりも、「島を永久の牢獄として与えてほしいと、信じられないほどの熱意」(Conf.,I,p.646)で願っているが、この消極さは世間とのさまざまな確執の結果でもあった。「過去の経験が、私を臆病にしていた」(Ibid.,p.645)からである。

本来の「怠惰」な性格に、確執の「経験」が加わり、ルソーの困難にたいする逃避的消極的対応がさらに進行する。境遇の困難に直面して省察や行動を開始することは、他者との関係のなかに身をおくことでもある。それはまた誤解を生じ、新たな不幸を加えることになる。それにルソーは、「自分が見たどの人のようにもつくられてはいない」(Ibid.,p.5)のであるから、他者に自分をいくら語っても無駄な努力になるであろう。彼は自分を外にあらわにすることなく、困難からの脱出と救済を求めざるをえない。結局は彼は自分一人の世界と向き合うことになる。『夢想』には、そのような自分を肯定する言葉が繰り返されている。「私が自分からすすんで自分をしばりつけてしまった。」(Rêv.,p.1042)「私は私だけで十分である。」(Ibid.,p.1075)「私は私自身だけを相手に心ゆくまで楽しんでいる。」(Ibid.,p.1084)

このようにみえてくると、ルソーの夢想は、夢想を可能にする想像力や受身的で怠惰であるといった彼の本来的の性向がまずあり、そして人間関係における摩擦を繰り返した生き方の必然的帰結という要因が加わって、誘発されていたといえるであろう。したがって、後者の要因が深まれば深まるほど、夢想の機会は増えた。『告白』や『対話』は、T.トドロフの指摘するように、「誤解を拭い去り、無実の証しをたて、彼のイメージを修正するために書かれた」<sup>3)</sup>といえるが、しかし生涯最後の著作においては他者に向けてではなく、自分に向けてルソーは語るしかなかった。この観点からいえば、最後の著作が『孤独な散歩者の夢想』と題されたのは当然の成り行きといえるであろう。

ルソーは、「バスチーユ牢獄」や「地下牢」でも夢想できるというのが、しかし、彼の夢想

は閉ざされた空間であるよりも、屋外が望ましいはずである。ルソーは散歩にでる。「夢想は、散歩のあいだ、頭をまったく自由にして、想念をなんの抵抗も拘束も加えず好きな方向に流れるにまかせておくと、あふれ出てくるのである。」(Ibid.,p.1002) 彼において歩くという行為は夢想だけでなく省察の契機でもあった。「歩くということには、何か私の思想を活気づけ、活発にするものがある」(Conf.,I,p.162)し、「私は歩きながらでなければ、思索できない」(Ibid.,p.410)のである。実際、彼が世に知られるようになった最初の著作『学問芸術論』の発端は、当時ヴァンセンヌに監禁されていたディドロを訪ねる歩行中のことであった(A Malesherbes,I,p.1135)し、『人間不平等起源論』も「一日中森のなかに深く入り、そこに原始時代の面影を求め」(Conf.,I,p.388)ることから、構想された。このように、ルソーの散歩は夢想と省察の両方の契機となっているのである。

ルソーは『対話』のなかで、散歩、夢想、省察の関係について次のように表現している。「彼(ジャン＝ジャック)は絶対的な閑居に耐えることができない。(中略)彼の肉体を動かしていなければならず、しかし頭は休めておかなければならないのだ。そこから散歩にたいする彼の情熱が生まれてくる。散歩では考えさせられずに動いていられる。夢想している場合は、人々は活動的ではない。意志の助けを借りない眠りのなかにいるのと同様に、イメージが頭のなかに描かれ、結合しあう。(中略)しかし事物に注目し、固定し、秩序だて、整頓しようとするときは、まったく別で犠牲を忍ぶのだ。推理や省察が混じると、瞑想はもはや休息ではなくなり、きわめて苦しい行為となる。」(Dial.,I,p.845) そのようなとき、彼は省察よりも夢想でありたいと願うのである。「ときとして私の夢想は省察となって終わることもあるが、しかし省察が夢想となって終わることのほうがずっと多い。」(Rêv.,I,p.1062)

散歩は無論一人である。孤独な散歩者においてこそ夢想はふさわしい。ルソーは内面の衝動に駆られるたびに、夢想する場所を求めて散歩にでかけた。『告白』における次の場面は、ルソーの夢想をよく特徴づけている例のひとつである。すなわち、彼はヴァランス夫人との日々、次のように回想している。「ある大祭日に、彼女が晩禱に行っているとき、私は彼女の面影と、そのそばで生涯を過ごしたいという望みで胸がいっぱいになって、町の外へ散歩に行った。(中略)私の夢想にはある悲哀がただよっていたが、といっても少しも暗いものではなく、楽しい希望がそれを和らげてくれるのであった。いつも不思議に心を動かされる鐘の音、鳥のさえずり、美しい日ざし、穏やかな風景、頭のなかで二人一緒に生活の場所と考えていた、点在する田舎の家々、それらすべてのものは、生き生きとした、優しい、悲しい、そしてほろりとするような印象でもって心を打ったので、私はこの幸福な時間、この幸福な生活のなかにあって、夢中の恍惚のなかにいるような自分をみたのである。」(Conf.,I,pp.122-3) 内面の憂いと散歩、そして「鐘の音、鳥のさえずり、美しい日ざし、穏やかな風景」や「点在する田舎の家々」など、ここにはルソーにおける夢想の重要な構成要素がすべて描写されている。

上述の例にあるように、夢想の客観的な要素として美文調で説明される情景は、名状しがたい自身の暗い内面世界と好対照をなしているといえるであろう。内面が憂いに閉ざされれば閉ざされるほど、情景は夢想にふさわしくルソーに迫る。内面と情景を媒介するのは想像力である。彼の場合、視覚的聴覚的情景がそこにあるだけでは、不十分である。情景を解釈する想像力が必要である。すなわち、情景の美しさや物音の心地よさは、その場にいる者の想像力の媒介を必要とする。その媒介がなければ感動は生まれない。「われわれ

に印象を与えるものにたいして想像力が魅力を付け加えないならば、そこで得られる不毛な快楽は器官に限定されたものとなり、常に心を冷徹なままにする。」(Em.,IV,p.418)

ルソーは内面の御しがたい情念に苦しみながら、周りを見渡す。想像力が活動を始める。その時はじめて諸事物が内面に一定の意味をもって浸透し始めるのである。ルソーのこのような局面について、J.=L.ルセルクルは次のようにいう。「風景が彼の感官に働きかけるとすれば、それはもっぱら心をつき動かしている時なのである。そういう時には、観客と舞台との間の相互作用のようなものが生まれている。そして想像力こそが、ひとつの風景の中で諸事物を有機的に構成し、魂との微妙な調和のなかでそれらに一定の意味を与えるのである。」<sup>4)</sup>ルセルクルの指摘にみられるように、ルソーの夢想において想像力は重要なような要素となっている。

## 2. 夢想の環境

上述したヴァランス夫人との日々への回想場面にも示されているが、ルソーの夢想が夢想として生気を帯びるには一定の環境設定が必要である。もともと彼には、周囲の諸様相が人間の感情を統制する源泉である、という思想があった。たとえば、『告白』によれば、パリを離れてエルミタージュに移った一時期、彼は『感覚的徳徳、または賢者の唯物論』と題する著作の構想をもっていたが、その下地となる考えは、気候、季節、音、闇、光、喧騒、静寂といったすべてが器官を媒介してわれわれの魂に作用する、そしてそれらは、「さまざまな感情を、その根源において統制するための、ほとんど無数の手がかりを提供している」(Conf.,I,p.409) というものであった。したがって、ルソーの夢想には魂に作用する一定の環境が要請されるのである。

水のある風景は、ルソーの好む夢想環境であった。「私はいつも水が情熱的に好きだった。そして水を見ると、しばしばはっきりとした対象はないのに、快い夢想におちいるのである。」(Ibid.,p.642) 夢想が小説になった『新エロイズ』の舞台も、湖水のほとりがどうしても不可欠である。「しかしながら湖水が必要だった。そのほとりを私の心が絶えずさまよい続けていた湖水を選んだ」(Ibid.,p.431) そこは、ヴァランス夫人の故郷でもあった。

水のある風景には、流れや波のざわめきなど一定の動きや音がある。このような視覚的聴覚的リズムが夢想を深まりに誘うのである。サン＝ピエール島滞在時のビエンヌ湖の岸边における、よく知られている夢想の場面は、こうした夢想の典型を示している。「夕方近くになると、私は島の高みから降りて、好んで湖の岸边に行き、どこか人目につかない砂浜の場所に腰を下ろした。そこにいと、波の音と水のざわめきに、五官はひきつけられ、魂は他のいっさいのざわめきを追い払われて、快い夢想に浸りきり、知らないうちに夜のとばりにつつまれていて、驚くこともしばしばであった。寄せては返す波の動き、とぎれなく続きながら間隔をおいて高まる音、それは休みなく耳目を打つうちに、私の内部で夢想が消した心の動きにとってかわり、これだけでもう私には、別に苦勞して考えたりしなくても、自分の存在がうれしく感じとれるようになっていくのであった。」(Rêv.,I,p.1045) 水面のゆらぎは「この世の事物の移ろいやすさ」を連想させ、ルソーはときおり現実世界の省察に引き戻されることもあるが、そうしたことは単調な波の動きや音の繰り返しのうちに瞬時に消え去っていくのであった。現実との微かな接点があるから夢想の密度もより濃くなっていく。J.スタロバンスキーが指摘しているように、「外界の波のざわめきは、ルソーが彼の充足の状態を知覚するために必要」<sup>5)</sup>であったのである。

ルソーが過去を回想して夢想体験に言及する場合、後述するように、体験をした時点の事実性よりも、書いているときの著者の心情が筆致に反映していると考えるのが自然であるだろう。『告白』で回想される若き日の夢想もまた、情景はビエンヌ湖のほりでの体験と同じように描写されている。リヨンで窮乏状態にあったときの場面では次のように書かれている。「露はしおれた草を潤し、風はなく、静かな夜であった。大気はひんやりとしているが、冷たくはなかった。太陽は沈んだのちも、空に赤いもやを残し、それが映って水を薔薇色にしていた。台地の木々には夜鶯がいて、鳴きかわしていた。(中略)快い夢に浸った私は、夜がふけてもさまよい、疲れにも気がつかなかった。」(Conf., I, pp.168-9) また、エルミタージュに移った時期にも同様の描写がある。その時期、彼は世間に正しく認められない自分を反省しつつ、一方で「自分の内面の価値を感じ」ていた。そしていう。「私はそういった瞑想を、一年のもっとも美しい季節の六月に、涼しい森陰で、夜鶯の歌や、小川のせせらぎに合わせておこなっていた。すべてのものが力を合わせて、このあまりにも魅惑的な安逸のなかに、また私を浸らせた。」(Ibid., p.426) これら二つの描写には、ビエンヌ湖のほりでの夢想と同じように、情景に水があり、波の音のかわりにリズムを刻む「夜鶯」がいる。このように、ルソーの夢想には環境的要因が深く関係している。

### 3. 夢想と作品

上述したように、エルミタージュに移ったときの夢想にしても、ヴァランス夫人との日々の回想ににおける夢想にしても、あるいは、彼の自伝的作品に描かれているほかの夢想場面にしても、情景がそのときそのようであったかどうかといった事実的なことは、そう問題ではないであろう。自伝は、「感情の連鎖」にもとづく「自分の魂の歴史」(Ibid., p.278)であって、事実的問題はもともと脇に追いやられているからである。ルソーにおいては、「現実の世界の断片の所有」よりも、「そうした所有に照応する魂の状態」<sup>6)</sup>が問題なのである。ルソーの感情、魂が事実にも真の意味を与える。だから、彼は「私の」情景を強調している。「常に私の森の茂み、私の小川、私の孤独な散歩が、思い出のなかによみがえる」(Ibid., p.401)「私の」情景が「思い出のなかによみがえる」、そこには、事実とは別の二重の創作がある。

またルソーは、「私は思い出のなかにしか精神が働かない」(Ibid., p.115)という。彼は、眼前の対象についてただちに思考をめぐらせ、事実のままに記憶するといったようなことはできない。眼前の事実にはたいしては、「何も感じないし、何の洞察も働かない。外的なものだけが私の注意をひく。だがそのあとで、それらすべてがよみがえってくる」(Ibid.)のである。のちに記憶をたどる作業のなかで、過去の事実を再構成していく。再構成の過程で事実が事実以上に詳細になる。詳細となった事実についてはソーは自信満々である。「私は場所、時、調子、視線、身振り、状況、なに一つ落とさない。(中略)そしてめったに間違うことはない。」(Ibid.) こうして、自伝は小説的様相を帯びてくるのである。

「感情の連鎖」上のルソーは、事実的文脈から離れて、小説の主人公のような役割を果たすこともしばしばである。『告白』のなかには、境遇がそのように仕向けた、という説明もある。「私は自分が想像する人物の一人となり、自分の趣味に従ってもっとも好ましい地位に身をおき、ついには架空の境遇に身をおくことによって、不満な現実の地位を忘れたのである。」(Ibid., p.41) それ故、自身の夢想体験に言及するとき、その時点における内面感情や情景がまるで小説の一場面のような描写として繰り返されるのである。

したがって、ルソー自身の「感情の連鎖」における夢想体験は、そのままに作品における夢想場面でもある。『新エロイズ』で、サン＝ブルーがヴォルマル夫妻によってエリゼと名付けられた果樹園に初めて案内される部分はそうした適例の一つであるだろう。サン＝ブルーはいう。「この果樹園なるもののなかに入りますと、私は心地よい清涼な感じにつつまれました。暗い木陰、いきいきと鮮やかな緑、ここかしこに点在する花々、流れる水のせせらぎ、数知れぬ鳥のさえずり、そうしたものが私の想像に、少なくとも私の感覚に訴えかけるのと同じくらいに訴えかけて清涼感をもたらしたのです。」(N.H.,II,p.471)翌朝サン＝ブルーは、いまはヴォルマル氏の妻であるかつての恋人ジュリの面影を辿ろうとして、再び果樹園に閉じこもる。子どもたちに囲まれた母としての、また夫にたいしては貞潔で有徳な妻としてのジュリを想像する。そして「あらゆるものが抗しがたい魅惑をもった情念の惑乱よりもさらに好ましい安らぎ」が得られ、「予期していたよりもさらに快い夢想」(Ibid.,pp.486-7)に浸った。

愛の対象を独占したいという情念の葛藤に苦しみながら、有徳であることを志向し、自然の甘美なたたずまいのなかで夢想に耽る、というこの『新エロイズ』の一場面は、ヴァランス夫人との日々における夢想、またドウドト夫人へ情熱を傾けた日々における夢想と共通の構図がみられる。ルセルクルのいうように、ルソーには「小説と人生のあいだの相互浸透が存在する」<sup>7)</sup>のである。

#### 4. 教育論と想像力

ルソーによれば、想像力はさまざまな体験を蓄積し、諸観念を獲得する過程で形成されてくる。「一本の草もない平原を長時間さまよったことがなければ、燃えるような砂に足の裏を焼かれたことがなければ、(中略)どうして美しい朝の新鮮な空気を味わうことができようか。(中略)恋と快楽の調べもまだ知らないのに、どうして小鳥の歌に官能をかきたてる感動を味わえようか。」(Em.,IV,p.431)したがって、想像力に欠けている人、たとえば子どもはルソーのいう夢想体験をもてないということになるであろう。

ルソーにおいて、いわゆる消極的教育方法によって育てられる子ども(エミール)は、想像力の発達を抑制するように教育される。「想像力の誤謬こそ、あらゆる有限の存在の情念を悪徳に変える」(Ibid.,p.501)からである。その方法論によって「物理的存在 un être physique」(Ibid.,p.458)として育つ少年エミールは、想像力が働かないので風景に感動することはない。また、教師がエミールを何らかの教育的意図をもって感動的な景色の場に連れて行くとしても、自分が得た感動を想像力の未発達な生徒に伝えてはならないのである。たとえば、教師がエミールに地理学を教えようとして、早朝、散歩に出る場面がある。「草木の緑は、夜のうちに新しい力をとりもどし、生まれでる日に照らされ、最初の光線に金色に染められて、露のきらきら光る網におおわれ、眼に光と色を反射してくる。合唱隊の小鳥たちが集まって、声をそろえて生命の父にあいさつする。」(Ibid.,p.431)こうした情景においては、『新エロイズ』、『告白』、『夢想』といった作品であれば、主人公はほとんど夢想状態であるだろう。現実の生活であれば、その場に居合わせる者は感動を共有することになる。その場に子どもがいれば、大人は風景から得られる感激や興奮を彼に伝えたいと思うであろう。しかし、ルソーによれば、そうした子どもとの感動の共有や伝達はできないし、それは「全く愚かなこと」とされる。そして言葉を続ける。「自然の風景の生命は、人間の心のなかにある。この風景をみるためには、それを感じなければならない。さまざま

まな対象は子どもの眼にみえるが、それらを結びつける関係は子どもにはみえないし、それらの合奏の甘美な和音は子どもには聞きとれない。こうしたすべてのものを一度に感じることから生まれる複合的な印象を感じるためには、子どもがまだ獲得していない経験が必要だし、子どもがまだ感じたことのない感情が必要なのである。」「この一日を満たすであろう歓喜を想像が彼に描きだしてくれなければ、どうして歓喜につつまれることができようか。」(Ibid.)

自伝的作品や『新エロイズ』のなかではしばしば夢想の舞台となるような風景描写が、『エミール』では上述した地理学を開始しようとする場面(A)を含めて三か所においてなされている。ほかの二か所は、助任司祭が若者に信仰告白をする場面(B)、そしてやがてエミールの伴侶となるソフィの家の庭を散歩する場面(C)である。いずれも、思春期から青年期への移行の時期、情念が芽生え、想像力が活動を開始する時期の教育的環境設定として叙述されている。(B)と(C)の場面を引用しよう。

「丘の麓をポー河がよぎり、その流れが地味ゆたかな兩岸を洗っているのが見はるかせた。遠方には、アルプスの巨大な山なみが全景の王冠をなしていた。さしのぼる日の光はすでに平野にさしそめ、木々の、小丘の、家々の長い影を野に投げかけ、光のさまざまな明暗で、人間の眼にふれうるもっとも美しい風景をゆたかにしていた。あたかも自然がその壮麗さのすべてを私たちの眼前にくりひろげて、私たちの会話に主題を提供するかのようであった。」(Ibid.,p.568)「この庭には花壇の代わりに、手入れのゆきとどいた菜園があり、外庭として、あらゆる種類の大きくて美しい果樹の植わった果樹園があり、それを四方八方、きれいな小川や、花でいっばいの花畑が区切っている。なんて美しいところだ、と愛読書のホメロスで心がいっばいの感激家のエミールはいう。」(Ibid.,p.783)

『エミール』におけるこれら三つの場面は、成長に応じた教育段階の重要部分である。(A)の場面は知識教育の最初の段階、(b)の場面は宗教教育を実施するうえでの状況設定、(C)の場面は恋愛の始まり部分である。この三つの場面について、想像力の発達という観点から、風景と被教育者のかかわりの描写に注意すると、ルソーの周到な叙述に気づかされるのである。すなわち、(A)では、上述したように、エミールは風景に感動することはない。教師のみが風景に心打たれている。同じ風景の前で感動を共有することはないのである。しかし、(B)では、自然がくりひろげる壮麗さを眼前にして、「私たちの会話に主題を提供するかのようであった」と、助任司祭と若者の感動が共有されていることが示唆されている。(C)では、成長したエミールは「なんて美しいところだ」と、感動を露にしている。エミールは夢想する資格に手が届くところまで成長したということであろうか。ここには、読書によって感受性をゆたかにしつつある若者と、美しい景色との間に「微妙な調和」がある。

ルソーは『エミール』の序文で、読者は「教育についての幻視者の夢想を読む思いがするであろう」(Ibid.,p.242)と予想しているが、実際、『告白』によれば、『エミール』第5巻は、夢想を誘う雰囲気の中で書かれたのである。「この深い心地よい孤独のなかにあり、森と水とのなかで、あらゆる種類の鳥の合奏と、オレンジの花の香りとともに、私は絶えざる恍惚のうちに『エミール』の第5巻を書いた。その十分に新鮮ないろどりは大部分、私がそれを書いた場所のいきいきとした印象のおかげである。」(Conf.,I,p.521)この証言を考慮すれば、まさにその書は夢想そのものの産物である、といえるであろう。しかし、その書のなかで夢想そのものに言及する部分はきわめて少ない。子どもには想像力が欠けているからである。

## おわりに

以上述べてきたように、ルソーにおける夢想では、内面的契機と客観的情景そしてそれらを媒介する想像力といった要因が必要である。しかし、夢想状態においては、それらの要因は次第に融合し、個性を消失していく。自分の存在感情すら危ういのである。「自分のことを忘れているときくらい、いい気持ちで瞑想に、夢想にふけることはない。私は、いわば万物の体系のなかに溶けこみ、自然全体と合一することに、言うに言えない恍惚と陶酔をおぼえる。」(Rêv.,I,pp.1065-6)自分を外部に拡大し、存在感情を消失させていく状態は、『新エロイズ』におけるクラランでのサン＝ブルーの体験と同質のものであるだろう。彼は閉ざされたクラランという小世界に自分の存在感情を拡大していく。「私にとっての全世界がここにある。(中略)私の存在は私を取り囲む一切のうちにある。(中略)私の想像力はもう何もすることがなく、私には何も望むことがない。(中略)私は愛するすべての人のなかで同時に生きている。幸福と生で満ち足りている。」(N.H.,II,p.689)ルソーもサン＝ブルーもひとときの夢想や幸福の状態に浸りきる。しかし、自己の喪失感がそうした状態の要件であるとしたら、それは永続きはしないであろう。ルソーにおいては、現実的世界に生きる人間の幸福ははかないものとされている。<sup>8)</sup>サン＝ブルーは、「おお、死よ、いつでも望みのときに来るがいい」と、言葉を続ける。『夢想』での虚無感、無常感の漂う夢想は、ルソーがその人生の終りの近いことを予感していたからであろうか。

## 注

- 1) 本稿に引用したルソーの著作は、ブレイヤード版 J.-J.Rousseau OEuvres complètesを参照した。なお、タイトルを以下のように略記し、そのあとにブレイヤード版の巻数を指示した。  
N.H.,La nouvelle Héloïse  
Em.,Emile  
A Malesherbes,Quatre lettres à M. le Président de Malesherbes  
Conf.,Les confessions  
Dial.,Rousseau juge de Jean Jacques  
Rêv.,Les rêveries du promeneur solitaire  
なお、訳は白水社版『ルソー全集』を参照し、一部修正を加えた。
- 2) J.ゲーノ著 宮ヶ谷徳三訳 『ルソー伝』 1962 (『ルソー全集 別巻一』1981 所収) 白水社 p.420
- 3) T.トドロフ著 及川穂訳 『はかない幸福——ルソー』 法政大学出版 1988 p.95
- 4) J.=L.ルセルクル著 小林浩訳 『ルソーの世界』 法政大学出版 1993 p.28
- 5) J.スタロバンスキー著 山路昭訳 『透明と障害』 みすず書房 1973 p.416
- 6) 同上書 p.354
- 7) 『ルソーの世界』 前掲書 p.262
- 8) 拙著 『ルソーの幸福観』 (『教育学研究紀要』 明星大学教育学研究室編 第11号 1996 所収) pp.85-6